

今後のアンチ・ドーピング活動の在り方に関する一考察
A consideration about what Anti-Doping activities should be

1K08B165-2

濱野純平

指導教員 主査 友添秀則先生

副査 磯繁雄先生

【本研究の動機・目的】

今日、スポーツとドーピングは切り離せない関係となっている。ドーピングの蔓延に対し、世界では 1999 年に国際オリンピック委員会 (IOC) がドーピング防止活動を促進し、調整することを目的に世界アンチ・ドーピング機構 (WADA) を設立した。日本でも 2001 年に日本アンチ・ドーピング機構 (JADA) が設立され、ドーピング防止活動の展開が可能になったが依然としてドーピングは行われている。

ではなぜドーピングはなくなるのか。それはスポーツの商業主義化の蔓延によりスポーツとカネが強く結び付いてしまったことや、それに伴ったスポーツの勝利至上主義指向が問題なのではないかと考えられる。それによってスポーツの外部環境が変化したことにより、かつて参加することが目的であったオリンピズムの精神が崩れ、スポーツの内部環境が変化し、競争が激化したことによりドーピングは更に助長されることとなったといえる。

また、ドーピング防止活動は主に検査によって展開されているが、検査方法の改良によってドーピング検査を強化しても新たな方法でドーピングが行われるという「イタチゴッコ」が続いており、検査によるドーピングの撲滅は困難であると考えられる。スポーツからドーピング切り離すためには、検査以外の活動のより一層の強化が必要であるように思われる。

そこで本研究では、勝利至上主義指向や商業主義指向によって、ドーピングの根絶が困難となっている状況を明らかにしたうえで、今後のドーピング防止活動はどのようにして行われるべきであるか考察する。

【本研究の方法】

本研究は、「世界ドーピング防止規程」とドーピング問題やドーピング防止活動に関する先行研究を対象とし、分析、考察をする文献研究である。

【第 1 章】

本章ではドーピングの歴史や定義の変遷を示し、ドーピングがどのようにスポーツ界に定着していったかを述べた。ドーピングの蔓延に伴い WADA が設立され、明確な

定義付けやドーピング検査が始まったが、ドーピングはなくなる所かむしろ巧妙さを増し、血液ドーピングや遺伝子ドーピングなどの新しい方法も開発され、ドーピングをずる側、検出する側による「イタチゴッコ」が続いていることを示した。

【第 2 章】

本章では、なぜドーピングはなくなるのかについて考察した。その原因の一つにスポーツの勝利至上主義指向と商業主義指向がある。スポーツとカネが密接に結びつき、オリンピックなどの世界大会での勝利は人生の成功に直結するようになった。その結果、勝てば莫大な富と名声が手に入るため、選手は多少のリスクは顧みずにドーピングを行うようになり、クーベルタン男爵が提唱したオリンピズムの精神は崩れてしまった。また、勝利至上主義指向がスポーツの内部構造を変化させ、競争という駆け引きの中でドーピングが助長されることを「四人のジレンマ」という有名なゲームにあてはめて示した。

【第 3 章】

本章では、現行のアンチ・ドーピング活動の展開とどのような問題点があるか、また今後の在り方について考察した。現行の活動はドーピング検査が主であり、検査には問題点が多く、競争が激化する中で検査でのドーピング防止には限界があると考えられる。また、ドーピング検査によりドーピングが助長され兼ねないという問題点もある。当然だが、ドーピングを行ってはいけないと選手が理解していればドーピング検査を行う必要性はない。そこで検査でなく啓蒙やモラル教育などの活動を積極的に行うことによって、勝利至上主義指向や商業主義指向と密接に結び付いたスポーツ構造を変化させることがドーピング撲滅のためのより良い活動となり得るのではないかという可能性を示した。

【結章】

本章では、まとめと、問題に対する具体的な解決策や活動の具体例の提示を今後の課題として示した。